

Title	萬葉集「佐太の浦」考
Author(s)	音代, 湘園
Citation	懷徳. 1958, 29, p. 57-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90326
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

萬葉集「左太の浦」考

音代 湘園

昭和廿六年三月に『枚方市史』が十余年の歳月を閲して完成刊行せられ、其記念事業として枚方市社會教育委員會主催で、枚方市内史跡めぐりが昭和廿六年十一月から昭和廿七年五月まで毎月一回、前後七回にわたつて舉行された。自分も東道者の一人として毎回此行に参加したが、今更脚下照顧の必要を痛感した。第三回目は廿七年一月蹠跣方面をさぐつたが、此時自分は『萬葉集』に見える「左太の浦」が或はこの枚方市の蹠跣には非ざるかとの疑ひを持つに至つた。今この地名に就て聊か考證の筆を進めてみよう。萬葉集には此地名が三箇所見えてゐる。即ち卷十一に一箇所卷十二に二箇所である。

○奥波邊浪之來縁左太能浦之此左太過而後將戀可聞

卷十一 寄物陳思 二七三二

○奥浪邊浪之來依貞浦乃此左太過而後將戀鳴 卷十二

馬旅發思 三一六〇

○貞能納爾依流白浪無間思乎如何妹爾難相 卷十二

寄物陳思 三〇二九

以上は『寛永本』の本文であるが二七三二の「邊浪」は『類聚古集』に「邊波」とあり三一六〇の「邊浪」は『元曆本』に「邊波」となし「此左太」は「比左太」と『細井本』に作り三〇二九の「納」は『類聚古集』及『古葉略類聚鈔』に「浦」とあり『西本願寺本』『紀州本』『温古堂本』に浦とある。勿論「浦」でなければ意が通じない。また「無間」を『元曆本』に「無及」に作り、「如何」の「如」の字は『古葉略類聚鈔』『紀州本』『温古堂本』『大夫本』『京大本』には無い。しかしこれらは地名「左太の浦」或は「貞の浦」「貞の浦」に何等影響を及ぼさない校異である。「さだのうら」には何等異字を認め得ない。さてこの「さだのうら」の地名はいづこに擬定すべきであるかを論ずる前に諸註釋書の從來の説を抄出する。(類似的書名以外は著者名略)。

○『八雲御抄』卷五名所部 浦 さたの 筑紫敷。

- 『萬葉代匠記』卷十一 さたの浦は筑紫なるよし、八雲御抄にせるさせたまへり。(初稿本) 左太能浦ハ八雲ニ筑紫ト注セサセ給ヘリ。(精撰本)
- 『萬葉集名寄』下之一貞浦 諸書ニ國マチマチ。家隆卿哥ニ、出雲ナルトヨメリ。
- 『萬葉考』卷四 貞浦は和泉に今在、また出雲國にもあり、いづれをここにいへるか。
- 『萬葉集略解』卷十一貞浦は和泉に今在り、又出雲にも有り、ここはいづれにか。
- 『萬葉集古義』十一卷之下 左太能浦は和泉に今在り、又出雲にもあり、ここはいづれにか、と略解にいへり、土佐に蹉跎崎あり、もしはそこならむも知べからず(今あしずりと云は蹉跎の字より出たる後の唱なり)
- 『萬葉集名處考』卷之三さたのうら (左太能浦)
(貞浦)(貞能浦) など書り、土佐國幡多郡伊佐村に、蹉跎御崎あり、即チ金剛福寺の山岬なり、後世に至りて、足摺山と呼り、彼ノ寺に藏る、應保年中より文明年中までの古文書ともに、皆蹉跎とあり、足摺といふは、近キ世に蹉跎の字に就て出來たる唱なり、此ノ岬の海に浦といふべき所ありて、實に奥浪邊浪のはげしくよせかへる地なれば、彼處にや。
- 『萬葉集新考』安藤野雁 卷十一萬葉考ニ云貞浦和泉出雲に今在り。
- 『萬葉集新考』井上通泰 卷十一サダノ浦はいづくにか知られず。
- 『萬葉集目安補正』第四左太之浦 筑前の國と云り。
- 『萬葉集總釋』卷第十一 左太の浦の 左太の浦は和泉ともいひ出雲ともいふが所在未詳
- 『萬葉集全釋』卷第十一 左太能浦之 左太の浦は和泉にも出雲にもあるといふがよくわからない。伊豫の佐田岬・土佐の蹉跎岬なども擧げられてゐるが、それらしくもない。卷十二にも貞能浦(三〇二九)・貞浦(三一六〇)と出てゐるから、名高いところであらう。
- 『萬葉集大成』浦は所在不明。(本文篇)
- 『萬葉集全註釋』卷十一サダノ浦は、所在不明。
- 『萬葉集評釋』窪田空穂 卷十一左太の浦の、所在未詳。土佐の國にも伊豫の國にも同名の岬がある。
- 『評釋萬葉集』佐佐木信綱 卷第十一 佐汰の浦佐太は和泉、土佐、出雲などにあつて、佐太・佐田・佐陀・狭田・佐多・蹉跎などと書いてゐる。
- 『萬葉地理考』(左太能浦)(貞浦)(貞能浦)未詳。伊豫國西宇和郡に佐田岬あり。この地の浦をい

ふにあらざるか。古義には「土佐國幡多郡なる蹉跎岬の附近なる浦ならむ」といへり。

○『萬葉辭典』佐佐木信綱 さだのうら左太の浦（地名）未詳。諸説（一）土佐國幡多郡なる蹉跎岬の附近なる浦であらう（古義）。（二）伊豫國西宇和郡に佐田岬がある。この地の浦か（萬地）。

○『萬葉集辭典』折口信夫 國郡未詳

○『萬葉集私注』所在未詳 サダは諸所にある名であるが、出雲風土記に見える佐太水海は考ふべき一つであらう。佐太湖は松江の西に、址を残して今は田野となつて居るといふ。河内の佐太も和名抄の郷名に見え、淀川に接した湖が存したといふから考へられぬこともない。

○『萬葉の遺跡をさぐる』「國文學解釋と鑑賞」昭和廿七年一月號。片岡一義 土佐この蹉跎御崎は今「足摺岬」ともいひ、土佐の西南端に突出する半島である。蹉跎岬と書いて「あしずりみさき」とも讀む。斷崖壁立數十丈、怒濤岩にあたつて碎け眞に右の歌景にふさはしい所であるが、單に地名を同じくし、地形の類似してゐる事によつてのみこの地を萬葉の歌枕とすることは危険である。配流の人でもなければこんな遠隔の地に訪ねて來る人もあるまいし、又

貞浦といふ地名が和泉の國にも又出雲、伊豫にもあるに於てはなほさらの事である。因みに蹉跎岬の附近には「蹉跎の浦」といふ地名はない。

○『萬葉集事典』佐佐木信綱 貞浦、貞能浦、左太能浦。未詳。佐太は和泉、土佐、出雲、などにあつて、佐太、佐田、佐陀、狹田、佐多、蹉跎などと書いてある。

以上羅列した萬葉集の諸註釋書は未だ定説を載せるまでに至らないで何れも臆測の程度を出ないので、筑紫、出雲、和泉、土佐、伊豫、河内等が候補にあげられてゐるが確證はない。『古事類苑』神祇部氏神の章に『神社啓蒙』を引用して左の如く記してゐる。

「佐陀神社在出雲國秋鹿郡、所祭之神四座也」（晉代註、イザナギノミコト、イザナミノミコト、スサノヲノミコト、ニニギノミコト）

又『和漢三才圖會』を引いて

「佐陀大社在秋鹿郡」（晉代註祭神四座）と記してゐる。更に類苑神體の章に『羅山文集』の引用がある。

「河内國茨田郡佐太郷有菅神廟、俗傳稱佐太、或作沙汰、」

又、別宮攝社の章に『皇大神宮儀式帳』を掲げ、攝社四

十社の中に左の明文がある。

「狹田神社一處 稱須麻留女神兒、速川比古、速川比女、山末御玉三柱、形無、同内親王定祝」

以上は神社であるが、寺院には名刹金剛福寺、別名、蹉跎寺がある。『續群書類從』所載の縁起によれば弘法大師が弘仁年中、嵯峨天皇の勅を奉じて創建したものである。『和漢三才圖會』に

「四國遍路八十八箇寺……蹉跎寺 三十八在 幡多郡伊佐村 山寺後深山本尊千手觀音立像八尺」

と見ゆるものがそれで、正應五年の政所下文に「幡多庄蹉跎御崎住侶等仰下條々」

といふ地名が記され、正應二年の院主權少僧都心慶が院主職を定慶法師に宛てた讓狀にも

「讓渡土佐國幡多庄蹉跎三崎金剛福寺院主職事」とあり、又文明十一年法印善雅の讓狀にも

「蹉跎山金剛福寺院主職昌宗法師讓興事」との明示があり、其他『土州淵岳志』には

「蹉跎山金剛福寺補陀洛院へ眞言第一ノ靈地也、京仁和寺末寺」

と見え、『日本行脚文集』にも

「蹉跎寺、かねて耳おどろく靈山、……本院金剛福寺、如眞法印に清談して案内をこひ巡禮す」

などと記され、これらは主として『古事類苑』からの孫引であるが、地圖を按ずると、土佐の西南端太平洋に臨んだ所である。さて現在「さたの岬」を他に檢すると、伊豫の西端と大隅の南端にある。悉く半島の尖端部である。今諸書の「さた」の記載を左に列挙する。

○佐太 島根縣出雲國八束郡の北部。大字佐太宮内に國幣小社佐太神社鎮座、古地名の佐太郷は今の佐太村、……。の邊を稱す出雲風土記に神戸里とあるのは即ちそれであらう。(平凡社大辭典)(日本地名大辭典同意)

○佐田村 大分縣豊後國宇佐郡の東部(大辭典)(日本地名大辭典)(大日本地名辭書)

○佐多村 鹿兒島縣大隅國肝屬郡の南端。その先端を佐多岬といふ(大辭典)

○蹉跎村 大阪府北河内郡の西部(音代曰、現在枚方市の南端)。淀川の東岸。和名抄佐太郷の内。(大辭典)(日本地名大辭典)

○蹉跎池 大阪府枚方市蹉跎川にある池。淀川の舊河道であらう。末は蹉跎川となり木屋池に入る。和歌の名所。古今六帖「我せこが老るを惜きさたの池のたまもにもがな刈あげはやさん伊勢」(大辭典)(大日本地名辭書同意)

○狹田國 出雲風土記國引の條に見ゆる地名。佐太國。

佐陀國。(大辭典)

○佐田岬 伊豫國西宇和郡三崎村の西端にある岬。三崎半島の先端とす。(大辭典)

○足摺岬・蹉跎岬 高知縣(平凡社大百科事典)

○狹田國生神社 三重縣度會郡田丸町大字佐田に鎮座。皇大神宮攝社二十四所の一。『延喜大神宮式』及び『神名式』に載つてゐる。『儀式帳』は狹田神社に作る。『太神宮本記』によれば、倭姬命皇大神奉じ伊蘇の宮から寒川を浜りました時、速河彥命途上に參會せられ、畔廣之狹田の國と白して佐々上の神田を進め、そこに速河狹田社を定め給うたといふ。

(大百科事典)

○佐多岬 鹿兒島縣肝屬郡佐多村にある岬。(大百科事典)(日本地名大辭典)

○佐田岬 愛媛縣西宇和郡にある岬。(大百科事典)(日本地名大辭典)(大日本地名辭書)

○祚田 筑前國の古地名。和名抄に上座郡祚田郷あり。

高山寺本には梓田郷に作る。その地今の朝倉郡高木村の邊に當り、高木村の大字佐田は郷の遺稱なるべし。(日本地名大辭典)(大日本地名辭書同意)

○佐太郷 和名抄、茨田郡佐太郷。今蹉跎村是なり(音

代曰く現在枚方市)姓氏錄「右京諸番、佐太宿禰、坂上大宿禰同祖、後漢後帝男延王後也」は此歟……蹉跎神社は蹉跎山に在り大字を中振と稱す、中振の名は觀心寺建徳二年文書に見ゆ。(大日本地名辭書)(音代註、中振關所觀心寺文書參看)

○佐太宮大庭 一番に在り(音代曰く現在庭窪町)蹉跎村天滿宮の分祠なり。慶安元年淀城主永井尚改造す。

(大日本地名辭書)

○佐陀川 松江市末次の西二十町(大日本地名辭書)

○奥津波……(萬葉)(此佐太浦は此地にや不詳)(大日本地名辭書)(音代曰く出雲)

○佐太 今佐太村及び古志村古曾志村の三となる。風土記に神戸里と録すれど、和名抄に之を缺くは、蓋

脱失に似たり。(大日本地名辭書)

○佐陀神社 今佐太村宮内の神名火山の麓に在り、神魂命の子、佐太大神を祭る。(神祇志料、出雲風土記)

(大日本地名辭書)

○佐田 若狹、常陸(大日本地名辭書)

○佐多 大隅(大日本地名辭書)

以上で諸書に見える「さだ」の地名の抄録を盡した積りであるが『和名類聚抄』には「河内國佐太」と記され、他に「さだ」の郷名が見えない。和名抄の國郡の部

は源順の原撰ではなく後世の編纂であるといふ疑問が提出されてゐたが、最近の研究では、本文に引續き著者の晩年に編輯されたことになつてゐる。(國語と國文學昭和廿九年一月號秋本吉郎氏論文)

「さだ」の地名が河内以外に和名抄に載つて居らないのは同書の編纂方針が國郡郷名に重點を置き、山名、河川名、海濱名、岬名などは載せないのが原則で、よしそれらのうちにどれ位、太古の名が傳はつてゐても、郷名でない限りは記載がないのであるから知るよしもない。唯一の郷名「佐太」は果して現在の河内に擬定して誤らないであらうか。

萬葉集の「左太」は「さだ」と濁音に訓むのが正訓である。「太」はすべて集中に於てしか訓じられてゐることは今日の定説である。しかも卷十一の歌の用字法の「左太」が濁音なることは卷十二の歌の「貞浦」「貞能酒」の用字法と照應して居ることが確固たる典據である。

「さだ過ぎる」とは「の熟語を構成して居り『源氏物語』などにも頻用せられてゐて傍證とすることが出來、萬葉の歌の「左太」の訓法に就てはかくて疑ふ余地がない。二七三二と三一六〇の歌は文字を異にするのみで全く同訓であるが、前者は寄物陳思の標目中に集められた一首であり、後者は羈旅發思の標目中に集められてゐる。歌

の意は三首共邂逅の好機に逢會し難きを歎息してゐるのであるが、同訓の歌が一方は寄物陳思の範疇を有し他方が羈旅發思の一群中に載つてゐることは、別々の編集者に依つて集められた歌が最後に一人の萬葉編集者によつて採用せられ重複をいとはず掲載されたのか或は重複に氣附かず採録されたのかの何れかである。又想像を逞うすれば用字法を異にする同一訓法の歌をわざと保存する目的で採用されたのかも知れない。羈旅發思といふ題は萬葉集以前の元典に既にしか記されてゐて、旅人の海濱逍遙中に詠まれたものであらうか。

太古の時代浪速の入江は蹉跎、枚方方面まで灣入してゐて、伊加賀崎や蹉跎山の裾を波が洗つてゐた。それは草香の入江の方面まで展開して居り、後徐々に灣が後退してからは淀川が現在の川筋より東方に偏し渚の岡、伊加賀崎、蹉跎山の斷崖の下に沿うて流れてゐた。現在渚の岡は淀川の水流から遠く離れてしまつたが、紀貫之が土佐日記に敘述する光景はすぐ接近した麓であり、伊加賀崎も高光集や古今集や續後拾遺集に歌枕として藤原高光、兼覽王、和泉式部がそれぞれ詠み込んでゐるのは枚方溫泉の丘陵から舊式内意賀美神社の跡に連る一帶の高地を指してゐて、現在淀川からは遠くなつてしまつた。しかし奈良時代には入江と淀川の水流とが合して廣く展

開してゐたことは明らかで、海であらうと川であらうと左太の浦と呼ぶ資格は充分にある。煩悶する萬葉歌人が寄せては返す波に沈思する姿は在原業平の東下りの粉本を思はせる。唯歌の姿から考察すると淀川と浪速入江とのけぢめが判然としない蹉跎の浦あたりのゆるやかに白浪の來寄る廣濶なる濱邊を詠じ且紋景に託した抒情である。浦と濱は河海兩者に共通する語で枚方でも鍵屋浦があり番所浦があり鶴屋の濱が地名として残つてゐる。

河内には「さだ」の地名が二個所ある。即ち枚方市と庭窪町とである。地形や水流から推定すると、後者の方は淀川の流れが西に偏して現在の如く固定せねば發生し得ない聚落であるが、枚方市のは丘陵が連り太古の水流が山裾を洗つてゐた時代でも存在可能な位置にある。どちらも菅原道眞を祀つた神社があつて地名の類似と共に兄弟關係にある土地柄で、一方の社は分靈社であらう。

平安時代の歌に左の訛傳の一首がある。

○我せこが老るかをしさをさしたの池の玉藻(たまも)にもかな刈(かり)あ

けはやさん 池 古今六帖第三第六

○我がせこをおぼゆるかをしき笹の池の菰にもがもや刈り上げはやさむ 夫木和歌抄廿三

今右の歌の校異を示すならば『河内名所圖會』に「をし

き」とあるは『活字本古今六帖』に「をしき」となつてゐる。作者は名所圖會に伊勢と記してあるが『古今六帖』には作者名がない。『伊勢集』をも見たが此歌は載つてゐない。『伊勢大輔集』にも見えない。古寫本の『古今六帖』に伊勢と標示したのがあつたならばそれに従ふべきであらうが、暫く疑問を残しておく。地誌類には悉く伊勢を作者としてゐるが『河内名所圖會』の孫引である。蹉跎の池は既述の通り枚方市に現在編入せられてゐる。『夫木抄』の歌は誤寫を重ねてかく變化したので本歌は『古今六帖』である。

○駒なべていざ見に行かむさだ川に枝さしかはすやまとなでしこ 歌枕名寄 源俊賴

今手許に『歌枕名寄』がないので比較出来ないが、源俊賴の『散木弃歌集』には右の一首は見當らぬ。澄月は如何なる歌集から引用したのか不明であるが今名寄を信憑して俊賴の歌とすると平安時代にはさだの池やさだ川が歌枕として著名であつたのである。蹉跎池は蹉跎山の南麓にあつて往昔は四個あつたが、現今は一個のみとなつた。此水流は香里に入り前川と稱し終には寢屋川に注いでゐた。蹉跎川は源を菅相塚に發し蹉跎池を経て香里(舊名「郡」)に入り前川となる。藤原家隆の『壬二集』下、戀部に左の一首がある。

○逢ふ事はいつと定めぬさだの浦の波の幾しほ戀ひ渡
るらむ

勿論題詠であつて、『萬葉集』の歌枕の模倣であるから、家隆の意識してゐたさだの浦は追及出来ないが、家隆が旅行家であるとは考へられぬから、若し彼の意識に上つたさだの浦があつたとしたならば近隣に求めるべきである。さて『萬葉集』の問題のさだの浦であるが、之を決する鍵は結局『萬葉集』自身の歌の配列によるより方法はない。二七三二の歌は卷十一の「物に寄せて思を述べ」の中に出てゐる一首である。而して此一連の歌の中に詠み込まれた地名を検すると志賀、腹野、葛城、小墾田、住吉、飛彈、難波、竹葉野、輕、二上山、三笠山、佐保、富士山、師齒追山、朝香瀨、安太、明日香川、大野川、泊瀬川、猪名山、鳥籠山、不知也川、宇治川、和麩野、千江浦、三津、菅島、夏身浦、名高浦、牛窓、志呵、比良浦、鹽津、都賀野、三島江、眞野池、飽等濱、伊勢等であつて、四國や九州や山陰道は見當らぬのである。しかも此歌は牛窓と住吉の間に挟まれてゐるのである。牛窓は備前國邑久郡である。三〇二九番の歌は卷十二の「物に寄せて思を陳ぶ」の中に出て來るもので此一連の歌の地名を再び檢すると、御室、布留、眞土山、佐保川、春日野神山、巨瀬、能登瀬川、取替川、斑

鳩、因可池、淡海の海、射駒山、佐保山、殺目山、鴈羽小野、佐紀澤、有間、吉野、三笠山、水莖岡、田上山、丹波、大江山、大崎、住吉、宗我河、奈良山、獵道池、斐太細江、檜隈川、卯名手杜、等であつて、しかも「さだ」の一首は淡海の海と射駒山の間に介在する。三一六〇番の一首は卷十二の「羈旅に思を發す」の一連の歌の中にあつて、矢張り同じ方法で地名を索出すると、度會大河、大和、豐州企玖濱、阿倍島山、越の大山、眞土山、藍木山、鈴鹿川、野州川、在干瀨、室の浦、飛幡浦、粟島、能登海、志呵、難波瀨、熊野、松浦、堀江、若の浦、蜻蛉野、等であつて、此一首は野州川と在干瀨の間にある。土佐の突端や伊豫の突端に旅行した歌人があつたのならよいが、そんな遠隔の地方へは官吏としての公用もなかつたらうから、従つて歌も發生する機會はない。そんな遠方へ行かなくとも常に己が近隣に自己の知つてゐる左太の浦があつたのであるから、手近な歌枕で充分用が足せる。そこで奈良人の意識に上つて來る左太の浦といへばいづこに求むべきであらうか。

大隅、出雲、和泉、土佐、筑前、伊豫、河内、豊後、伊勢、但馬、豊前、若狹、常陸、伯耆

かく並べてみて果して何處が適格であるか。吉田東伍博士が『和名抄』の佐太郷を以て河内の現在の蹉跎即ち枚

方市の地名に擬して居られるのは歴史的地理的双方の條件を具備した妥當説である。佐太宿禰は姓氏録に見え後漢の延王の子孫である。奈良朝人の直ちに思ひ及ぶ近畿の地名が此際掛言葉として、序詞として此一連の三首の歌に最もふさはしい様に解せられる。突飛な遠隔の地名を用いたならば當時の都人には直接感覺に訴へる何物をも持たないのである。大和人に最も親近感を興へるのは此河内の蹉跎の浦であつたであらう。今でこそ蹉跎は淀川の本流から遠ざかつてしまつたが、既述の如く千三百年前は男山、渚岡、萬年寺山、伊加賀崎、蹉跎山の諸丘陵の麓に沿つて流れてゐたので現在の此邊の淀川東岸の低地は河底地である。伊加賀崎が古歌に登場すると共に、蹉跎浦も一つの景勝地としてはた歌枕として奈良平安人士に採り上げられ、且「さだの浦」といふ地名が歌人の頭に描かれ、常時脛に浮び上つてゐたればこそ「さだすぎて」の序として使用されたのである。因みに河内の現在の呼稱は庭窪町の方は「さた」と清音にも訓み枚方市のは「さだ」と必ず濁音に訓まれる。竹田出雲の淨瑠璃『菅原傳授手習鑑』に見える「佐太村」は庭窪町の様には思はれる。

かくて自分は大胆にも假説として『萬葉集』の「さだの浦」は枚方市の蹉跎に擬定して最も適應性があること

を覺える。「さだすぎて」とは好機を逸し盛りの齡を過ぎる意味で後世の文學では『宇津保物語』『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』『和泉式部集』にも度々用ゐられてゐる語句であつて、盛年重ねて來らずの歎である。

『萬葉集』卷十一は賀茂眞淵の説く如く集中でも一層時代的に溯る作品集であつて、太古程浪速入江の灣入も廣く、蹉跎山には古墳菅相塚があり丘陵地一帯に小古墳が散在し、時折埋藏物の發掘があり、蹉跎天滿宮境内からは鎌倉時代の龍光寺の古瓦が出土するなどから察して早くから開け聚落として人々が住みついてゐたので、彌生式土器や其他の遺物が枚方丘陵蹉跎丘陵から出土することから見ても『萬葉集』の「左太の浦」に對する條件を具備してゐるのが枚方市の蹉跎である。眞帆、片帆の扁舟が往來した此浦に遠く近く寄せ來る白浪にやるせなき思を託して佇む情熱の萬葉歌人を空想しながら毎日近代的交通機關に身をゆだねる。

